〈学界消息〉

◇日本環境教育学会関西支部第３回研究大会のあらまし　～ 新しい世紀へのうねり ～

まえがき

1994年度は15題23名の研究者による発表があり、一般報告のあとに特別講演と総合討論が行われた。約80名の参加者が師走に入った大阪教育大学柏原キャンパスに集まり、環境教育でひとつになる一日を過ごした。

日本環境教育学会の研究発表大会としてはささやかな規模のものではあるが、市民ボランティア、学校の教員、学生、行政職員、企業関連者など多分野の人たちが研究発表や討論に参加した。発表内容もいろいろな視点からであったが、それぞれの研究者が、自己のできる範囲内でベストをつくしたものであるから、聞き手にとっても思わず参加意識に誘われる迫力ある研究大会となった。

一般報告

２つの会場で午前・午後に別れて行われたが、分科会の形はとらなかったので、環境教育の全体的な立場からまとめて報告したいと思う。個々のテーマの内容やねらいは、研究大会要旨集を通読されたい。

◆「心の教育」という視座より

２つの会場で冒頭に発表された西本さんの「サイ科学系情報の動向と環境教育の課題」他１と、本庄さんの「心の環境教育へのアプローチ ―― 障害児教育を通して ――」は、ともに「心」の問題からの環境教育へのアプローチである。前者は、ニューサイエンスの視点から環境科学のパラダイムを問い直すものであり、いま直接に環境学習にかかわる内容ではないが、近未来の大切な課題提供であると考える。それにたいして後者は教育現場の現実的問題、とくに一人の心臓障害をもった教え子の短い一生を、担任としてその子の「生」見つめながら訴えた発表は、感動的…というよりは今までの環境教育が置き去りにしてきた問題を発表者は提起している。

◆「アメニティ教育」の視座で

「環境教育の視点からみた河川と人間生活に関する基礎的研究 ―― 建設省『ふるさとの川整備事業』の分析より ――」という藤岡さんの発表は、なぜ環境教育にとって『ふるさとの川』なのか、この研究は人間の生活の大切な環境要素としての緑や生きものにもつながって行くだろう。高畠さんの発表した「子供たちとしたツバメの巣調査」や「学校のプールの水生昆虫相調査による学校周辺の環境評価と教材化の試み」長崎さんの発表も、研究者独自の意図はあると思うが、同じ環境教育（アメニティ教育という）の一環としてみることができるだろう。この範疇で考えると、松永さんの「保育者養成と環境教育 ―― 環境地図の作成と生態系概念の育成 ――」は大学教育における、また藤本さんの「地域資源を参加者自ら調べ発表する普及講座の試み」は博物館が行う社会教育の、アメニティ教育としての側面からの研究と解釈される。

◆「環境学習指導方法」から

和歌山県立高陽高校の岸田さんらが発表した「『環境科学Ⅰ・Ⅱ』の取組み」や上田さんの「in, about, forの観点からみた廃棄車イスのリサイクルの授業の意義」は、中・高校において、また的場さんらの「生態系概念の育成に関する研究 ―― 絵を見て作った文章の分析から ――」と奥村さんの「児童・生徒の土に関するイメージ・体験・認識の実態について ―― 大阪府下でのアンケート調査事例をもとにして ――」は小学校において、学校における環境教育が最初から問題にしながら、現在でも未解決の問題が山積する指導方法に取り組んだ実践として、教育現場の教師には貴重な研究報告であった。千葉県立中央博物館の林さんの「ＮＩＳ：環境教育の評価・分析のための一つの枠組み（予報）」は、研究が完成すれば、環境教育がますます多重構造化する中で、教育者や研究者が自己の教育または研究活動を位置付け

るための指針として期待される。逆にあまり公的機関によって枠組みが提唱されると、「環境」や「環境教育」研究が拘束されたり柔軟性を失いはしないかという不安も感じられた。

◆「地域活動」からの視座

地域社会での環境学習には、子どもが主役となることが多い。飯島さんらの「小学生の見たまちの環境 —— 宝塚こども環境会議へのとりくみ ——」と青田さんらによる「都市の社寺林をフィールドにした環境教育 —— 天王寺区の子供会活動の事例 ——」はその実践報告である。この場合、地域の誰が子どもの集団を援助・支援するのか、そこで地方自治体行政や地元の住民、ボランティアグループの共同（パートナーシップ）が重要な条件になる。前者の発表では行政が中心になってそれを支え、後者では地元の子供会関係者や学生ボランティアが、公的機関の支援を受けながら自主的に展開した好例である。このように地域社会が舞台になれば、自分の日常生活環境を自分たちで見直すことからまちづくりに参加する可能性もうまれて、リアリティに富んだ効果的な環境学習ができるものと考えられる。

特別講演

「海外および日本における湖沼環境教育の事例」と題して、滋賀大学教育学部教授、川嶋宗継先生にご講演をしていただいた。先生は国際湖沼環境委員会（ILEC）の一員として、環境教育パイロット事業に参画された。アルゼンチン，ガーナ，タイ，デンマーク，ブラジルなどの各国とわが国（湖沼環境教育しがプロジェクト）のパイロット校として指定された小・中学校の、教師を中心とした湖沼環境教育の事例を紹介された。各国の国情によって取り上げる教材は、自然の問題、人間に係わる問題など現象的には異なっていても、その背後に存在する集水域に関する問題は共通であることを強調された。特にその自然環境，社会環境，人間生活環境など、環境教育に関する必要なすべての要素が含まれているという認識に基づき、１９８９年に、湖沼の健全な管理をめざすILECの事業として、環境教育が位置付けられたことも話された。現在、各国では湖沼環境教育を通して、酸性雨，森林生態など地球的視野で取り組まねばならない環境問題を、日常生活とのかかわりにおいて理解することが可能となる、カリキュラム作成の基礎について検討し、検証的に研究を進めている。

総合討論

研究大会のさいごは、「パートナーシップによる地域を中心とした環境教育のすすめ方」をテーマに、昨年大会のパートⅡとしての総合討論が行われた。司会は筆者が担当し、フロアからのフリートーキングで進められた。まず宝塚市のこども環境会議の取り組みが説明され、他の地方自治体の環境行政担当者からも活発な発言があった。行政が環境教育を推進して行く場合の問題点について、特に吹田市，八尾市，大阪市などの担当職員から、環境行政の機構や市民、関連各部門とのコミュニケーション等についての問題点が話された。（ちなみに今回の研究大会には、関西の９自治体の職員の参加があった）市民団体やボランティアグループからは、ツバメの巣調査や社寺林をフィールドにした子ども会活動などの発表を話題にして、保健所，教育委員会，環境科学研究所などの公的機関との共同と、一方教師グループの自主活動，学生のボランティア，地域の自然保護団体などとの共同についても議論された。また、このような小地域だけの環境学習活動が、どこまでグローバルな環境問題に迫ることができるかという疑問もだされ、パートナーシップのあり方や活動の展開のし方が、今後の課題として残された。

あとがき

「今、私たちに求められているものはなにか。まず、お互いの立場を尊重しあい、多様な価値観を認め合い、そこから共通の価値観を生み出していく努力である。環境教育はその努力の一つの姿であり、したがって『いじめ』問題をはじめ、人種差別など国際問題に至るまで幅広い視野をもって活動されるものである。」（研究大会要旨の“はじめに”より）という鈴木善次さんの言葉をお借

りするとすれば、規模は小さくとも、様々な分野の人達たちがいろいろな立場で精一杯やったことを語り合い、話し合うことができた今回の研究大会は、素晴らしい「民主主義の学校」になったと思う。単なる情報交換に終わらせないで持続可能な実践につないでいくことによって、「新しい世紀における教育」のうねりが関西からつくり出されることを期待している。

（関西支部世話人代表　赤尾整志）

○日本環境教育学会関西支部第３回研究大会
（1994年12月10日／大阪教育大学柏原キャンパス）
プログラム
特別講演　14: 10-15: 20
「海外および日本における湖沼環境教育の事例」
講演：川嶋宗継（滋賀大学教育学部）
総合討論　15: 40-17: 00
「パートナーシップによる地域を中心とした環境教育のすすめ方－地域，学校，社会，行政が一体化した環境教育の推進（パートⅡ）」
司会：赤尾整志
一般報告
A-1 サイ科学系情報の動向と環境教育の課題
西本安範（日本アクティブ[株]）
A-2 オゾン層破壊による生態系危機の進行と日本の課題　西本安範（日本アクティブ[株]）
A-3 環境教育の視点からみた河川と人間生活に関する基礎的研究－建設省「ふるさとの川整備事業」の分析より－　藤岡達也（大阪府立勝山高等学校）
A-4 「環境科学Ⅰ・Ⅱ」の取り組み　岸田光平・宮下和己・田伏政昭（和歌山県立向陽高等学校）
A-5 子供たちとしたツバメの巣調査　高畠耕一朗（吹田市立第五中学校）
A-6 in, about, forの観点からみた廃棄車イスのリサイクル授業の意義　上田　学（大阪教育大学附属天王寺中学校）
A-7 学校のプールの水生昆虫相調査による学校周辺の環境評価と教材化の試み　長崎　摂（豊中市立第十七中学校）
B-1 障害児教育と環境教育の接点　本庄　眞（奈良県東榛原小学校）
B-2 生態系概念の育成に関する研究－絵を見て作った文章の分析から－　的場克己・平瀬憲利（大阪教育大学・学生）
B-3 児童・生徒の土に関するイメージ・体験・認識の実態について－大阪府下でのアンケート調査をもとにして－　奥村裕之（大阪教育大学・院生）
B-4 保育者養成と環境教育－環境地図の作成と生態系概念の育成　松永三婦緒（大阪薫英女子短期大学）
B-5 地域資源を参加者自ら調べ発表する普及講座の試み　藤本真里（兵庫県立人と自然の博物館）
B-6 小学生の見たまちの環境－宝塚こども環境会議へのとりくみ－　飯島 隆（宝塚市環境経済部・岡 靖敏（グローバル環境文化研究所）
B-7 都市の社寺林をフィールドにした環境教育－大阪市天王寺区の子供会活動の事例－
青田寛子・奥村裕之・久良美幸・藤田 稔（大阪教育大学・学生院生）若月雅裕（立命館大学・学生）・原田智代（天王寺区子供会育成連合協議会）

◇日本環境教育学会関西支部ワークショップ
報告「防災教育と環境教育」（3月11日）

「この度の震災に遭われた皆様に謹んでお見舞い申し上げます」

３月のワークショップが甲南大学（昨年度の全国大会会場）を中心に行われた。午前中の集合場所の摂津本山駅前ロータリー自体が、１階がつぶれ、傾いたビルに取り囲まれている。この近辺は、震度７に指定され、多くの犠牲者を出し、建物が多数倒壊した地域である。震災から２ケ月近くたったと言うのに火災跡や崩れた建築物は震災時の凄さまじさをそのままにとどめており、添えられた花束が目に痛い。また、甲南大学の西側を流れる住吉川は昭和13年の阪神大水害で多くの犠牲者を出し、川沿いでは何カ所かに鎮魂碑とも言うべき当時の記念碑が建てられている。全員が案内者のもと巡回するするという計画もあったが、被災者の方々の感情も考えて、集合場所で付近の地震関連地図を配布し、簡単に説明を加えたあと、各自

・各グループで廻ってもらうこととした。

午後からは、甲南大学に会場を移し、昨年度の全国大会の委員長でもある谷口氏（甲南大学）から甲南大学での被害状況の報告のあと、話題提供・討論が行われた。話題提供は「防災教育と環境教育－自然災害を環境教育の中でどう捉えるか－」の題目で、内容は以下の通りである。

1．はじめに「天災は忘れる間もなくくる」

2．自然災害の特徴－自然現象が災害に変わる時－(1)自然現象と人間生活への影響(2)災害の複合的要素

3．自然災害と自然科学－科学技術の成果と限度－(1)科学・技術の発展と自然理解(2)災害予知と防災体制

4．自然災害に対する環境教育の視点－環境教育での取り組み－(1)学校・家庭・社会で行う防災教育(2)土地利用変化に伴う地形改変の影響(3)地域の歴史・自然から学ぶ姿勢

5．今後の課題(1)生活のための知識の必要性(2)重要なＳＴＳ教育の視点

その後、総合討論が行われたが、実際に被害を受けられた方々の取り組みや意見、神戸市の行政に関わっている人々の発言など多くの教訓が得られたワークショップであった。

なお、本年度の環境教育学会全国大会（千葉）の時に、阪神大震災にかんする自由集会が急遽もたれることとなった。このワークショップの成果が全国大会にも生かせることを願っている。

（関西支部　藤岡達也）

◇日本環境教育学会関西支部の活動（1994年2月～1995年3月）

○ワークショップの開催（話題提供者及びテーマ）1994年

第31回（２／26）南河内水と緑の会　炭焼き作業・里山体験

第32回（３／25）ＵＮＥＰ施設とさくやこの花館施設の見学

第33回（４／23）槇村久子（奈良文化女子短期大学）女性・環境・開発

第34回（６／18）田中孝典（「メダカの学校大阪」グループ）水の浄化と地球環境－水＝生命の源－

第35回（７／16）尾川　耕（Run for the Future）若者がする環境保全活動

第36回（９／17）中丸寛信（甲南大学）企業の環境への取り組みと教育

第37回（10／15）塩川哲雄（大阪府立磯島高等学校）ＳＴＳ教育教材「水俣病」と環境教育開放講座

第38回（11／20）浦西　勉（奈良県立民俗博物館）民俗学から環境教育への展開－人間との長いつきあいから生み出された風景から学ぶ－1995年

第39回（３／11）藤岡達也（大阪府立大学・大阪府立勝山高校）防災教育と環境教育－自然災害を環境教育の中でどう捉えるか－

○1994年５月14日～15日　　日本環境教育学会第５回大会　甲南大学（神戸市）

○1994年12月10日　　日本環境教育学会関西支部第３回研究大会

○ニューズ・レターの発行（『関西ECOMAIL』）第20号（1994.3）　第21号（1994.5）　第22号（1994.8）　第23号（1994.9）　第24号（1995.2）

◇第41回日本学校保健学会シンポジウム

「環境教育と学校保健」（1994年11月26日／八尾市プリズムホール）

学会長 大阪教育大学教授　上延富久治：学校保健に「環境教育」の明確な位置づけを

大阪教育大学教授 鈴木善次：環境教育研究の立場から

岡山大学医学部教授 青山英康：公衆衛生研究の立場から

埼玉大学助教授 阿部　治：諸外国における環境教育の取り組み

阪南市立下荘小学校養護教諭 田口正美：養護教諭の実践活動を通じてー児童の保健委員会活動を中心にー

八尾市立龍華小学校校長 坂本禎男：学校経営の立場から

◇第58回日本生物教育学会全国大会
（1995年1月28日－29日／愛知教育大学）
環境教育に関連する発表およびシンポジウム

一般発表
環境問題に対する高校生の関心ー「破壊が進む生態系」を題材として
　萱野貴宏（静岡大学）・丹治一義（静岡学園短期大学）・鈴木正幸（静岡県立浜松工業高等学校）
中学校・高等学校の環境教育としての「土」教材の開発
　松田仁志（大阪府教育センター）
環境教育における里山林の教材化について
　磐田好宏（千葉県立千葉高等学校）
生物教育における土壌の取り扱いのあり方に関する考察Ｉ－土の性質・機能－
　福田　直（埼玉県立自然史博物館）
自然に近い河川の浄化作用
　春名俊範（岡山大学大学院）田羅征伸（岡山大学）
フィールド学習「踏み跡の植物群落の分布」の実践研究
　岸本　浩（兵庫県立伊川谷北高等学校）
生物ＩＡでの環境教育の授業実践ー「自然の中の人間」の効果的な取り組みー
　林　誉樹（愛知県立時習館高等学校）小笠原昇一（愛知県教育センター）
水をきれいにしてくれる微生物たちーＳＴＳ教育を目指した活性汚泥の教材化ー
　田村直明（岐阜県立八尾津高等学校）

展示発表
身近な自然を生かした環境と生物のつながりをとらえる学習支援教材の開発
　川上昭吾・和久田愛・森田早織・佐藤尚美（愛知教育大学）
ミカンの木はなぜ丸坊主にならないかー環境教育の一環として自然界の平衡を考えるー
　佐藤尚美・川上昭吾（愛知教育大学）
シンポジウム
「環境教育における生物教育の果たす役割と問題点」
　司会：濱島繁隆（愛知県高蔵高等学校長）

◇京都市教育委員会　平成６年度環境教育実践発表会（1995年２月28日／京都市立永松記念教育センター）
　環境教育賞「エコ大賞」が設立され，以下の各校が受賞した。

「エコ大賞」受賞校
　京都市立朱雀第三小学校，京都市立小栗栖中学校
「優秀賞」受賞校
　京都市立竹間幼稚園，京都市立朱雀第四小学校，京都市立修学院小学校，京都市立修学院中学校，京都市立大原中学校，京都市立西院中学校
「特別賞」受賞校
　京都市立東養護学校

実践発表
　京都市立朱雀第三小学校「身近な環境問題に気づく子どもをめざして」
　京都市立小栗栖中学校「人にやさしく、街にやさしい環境ボランティア活動」

環境教育研修講座　講演「食と農をめぐる環境教育」　鈴木善次（大阪教育大学）